

2025 年度 自己点検・評価報告書

文学研究科評価分科会

2026 年 2 月

基準4 教育課程・学習成果

1. 学修に関するもの

学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。また、学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

【1】今年度の自己点検・評価の方針・改善計画

① 学修成果の測定方法

成績分布から学修成果を測定する。

② 効果的な教育を行うための工夫（シラバス、授業形態、履修計画の指導等）

科目・教員間のシラバスの精粗を改善する。学生が研究内容に即した履修計画を立てることができるよう、指導教官が指導する。

【2】今年度の自己点検・評価結果

① 学修成果の測定結果

2024年度の成績分布は、A+が27.3%、Aが32.9%、A-が12.2%、B+が10.1%、Bが4.8%、B-が3.7%、C+が1.9%、Cが2.7%、Dが1.3%、Nが3.2%となっている。A+とAが全体の60.2%を占めていることから、概ね良好な学修が達成されたといえる。

② 効果的な教育を行うための工夫（シラバス、授業形態、履修計画の指導等）

一方で、C+～Nまでの分布が9.1%となっていることから、成績の底上げをはかり、学修成果をさらに担保する必要がある。

2. 教育課程に関するもの

教育課程の編成・実施方針に基づき、学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

【1】今年度の自己点検・評価の方針・改善計画

① ナンバリング、ディプロマ・ポリシーと開講科目・成績の照らし合わせ

ナンバリング、ディプロマ・ポリシーと開講科目・成績の照らし合わせについては、文学研究科全体の取り組みはされていない。

【2】今年度の自己点検・評価結果

① ナンバリング、ディプロマ・ポリシーと開講科目・成績の照らし合わせ

秋学期に評価分科委員に個別に聴取した結果、文学研究科委員会で本項目を審議することになった。3月度の文学研究科委員会で本項目を審議事項とし、来年度の自己点検・評価に備える。

3. 就学状況

【1】2025年度の自己点検・評価の方針・改善計画

① 学籍異動の状況（卒業、休学、退学の状況など）

専攻ごとの修了・休学・退学の状況を把握し、休学・退学の人数が多い専攻については、原因を特定し、修了に導く方策を立てる。

【2】今年度の自己点検・評価結果

① 学籍異動の状況（卒業、休学、退学の状況など）

2025年度春学期における文学研究者の学籍異動（入学年度2020～2025）は、在籍者71名、休学者6名、修了者95名、退学者9名の計181名であった。文学研究科全体では、休学・退学とも、各届を見る限り、経済問題が大きな要因となっていることがわかっている。指導教員とも連携をとり、より詳細な要因の分析を進めたい。本項目については、3月度の文学研究科委員会で審議する。

4. 改善計画

【3】今年度の点検・評価に基づいた改善計画

① 短期計画（アセスメント実施後1～2年の期間で実現可能な改善策）

休学者・退学者が出た場合、研究科長が指導教員と面接し、詳細な要因の把握に努める。

② 中長期計画（アセスメント実施後3～5年の期間で取り組む改善計画）

今年度秋学期は、2028年度改組に向けた準備が本格的に始動する。このため、具体的な改善計画については、改組案にもとづくカリキュラム改編を見据え、来年度以降の具体的な取組みの実施後、点検・評価を経て実現可能な中長期改善計画を立案する。

基準5 学生の受け入れ

1. 学生の受け入れのための広報活動全般について、適切に実施しているか。

- ・オープンキャンパスにおける取組み
- ・授業体験や姉妹校との連携事業などの実施状況

【1】昨年度の自己点検・評価で課題となった事項および今年度の方針・改善計画

- ・オープンキャンパスにおける取組み

評価分科会で議論した結果、オープンキャンパスで文学研究科の広報活動を行うことは、昨今の学部志願者の減少とオープンキャンパスの受験生・保護者の来学理由からみて適切ではないと結論した。このため、現状では、文学研究科では、オープンキャンパスにおける具体的な広報活動は行わないこととした。

- ・授業体験や姉妹校との連携事業などの実施状況

授業体験についてはこれまで学部生から個別の希望はあったが、文学研究科全体では実施しなかつ

た。

文学研究科の社会学分野では22の他大学大学院との単位互換制度加盟制度が存在するが、加盟校もふくめて十全には機能していない。学生への周知徹底を行いたい。

【2】今年度の取組みに関する点検・評価結果

・オープンキャンパスにおける取組み

今年度も、昨年度に引き続きオープンキャンパスにおける広報活動の具体的な取組みは行っていない。上述のとおり、昨今の学部志願者の減少とオープンキャンパスの受験生・保護者の来学理由から、今年度もオープンキャンパスでの取組みは行わない。

・授業体験や姉妹校との連携事業などの実施状況

今年度春学期は、授業体験や姉妹校との連携事業は実施していないが、秋学期に、各専攻で1～2科目を選定して、授業体験を実施予定である。

昨年度に引き続き、文学研究科の専攻ごとの学部生向け大学院進学ガイダンスをオンラインで開催した。ガイダンス参加者からは、5年一貫プログラムに対する質問がでるなど、優秀な文学部生の進学志望者の増加について、一定程度期待を持つことができた。本ガイダンスは、2028年度の改組を見据えて、来年度以降は年2回の実施をめざしたい。

【3】今年度の点検・評価に基づいた改善計画結果

<短期計画（アセスメント実施後1～2年の期間で実現可能な改善策）>

文学研究科の哲学分野の大学院授業では、文学部生の見学が実施されている。来年度以降は、学部とも連携し年2回程度の授業公開を制度化し、授業体験の機会とする。

姉妹校との連携では、創価学園の東京校・関西校の優秀層に対してあらかじめ希望をとり、両校の創価大学での研修や模擬授業などの来学時に研究室訪問などができるような体制を整えたい。また、専攻ごとの大学院進学相談会は、年2回程度実施することを制度化したい。以上の来年度の具体的な取組みの実施後、点検・評価を経て実現可能な短期改善計画を立案する。

<中長期計画（アセスメント実施後3～5年の期間で取り組む改善計画）>

今年度秋学期は、2028年度改組に向けた準備が本格的に始動する。このため、具体的な改善計画については、改組案にもとづくカリキュラム改編を見据え、来年度以降の具体的な取組みの実施後、点検・評価を経て実現可能な中長期改善計画を立案する。

2. 合格者に対する入学前教育等を適切に実施しているか。また入学後の学生に必要な支援（リメディアル教育・初年次教育等）を実施しているか。

【1】昨年度の自己点検・評価で課題となった事項および今年度の方針・改善計画

昨年度、文学研究科全体としては、入学前教育、リメディアル教育、初年次教育などの取組みは行

っていない。ただし、指導教員によっては、個別にメールで連絡や指導が行われている事例が散見された。

【2】今年度の取組みに関する点検・評価結果

今年度も、昨年に引き続き入学前教育、リメディアル教育、初年次教育などの全体的な取組みは行っていないが、文学研究科委員会でメールでの個別対応依頼を文学研究科教員にアナウンスした。

【3】今年度の点検・評価に基づいた改善計画結果

<短期計画（アセスメント実施後1～2年の期間で実現可能な改善策）>

来年度は、合格者に指導教員が連絡をとり入学前の準備について可能な限り対応することにした。リメディアル教育と初年次教育な具体的な内容については、来年度に議論を行う。これらの取組みの実施後、点検・評価を経て実現可能な短期改善計画を立案する。

<中長期計画（アセスメント実施後3～5年の期間で取り組む改善計画）>

今年度秋学期は、2028年度改組に向けた準備が本格的に始動する。このため、具体的な改善計画については、改組案にもとづくカリキュラム改編を見据え、来年度以降の具体的な取組みの実施後、点検・評価を経て実現可能な中長期改善計画を立案する。

学生の意見聴取

主として以下の観点を参考に、今年度の点検・評価および今後の方針を記入してください。

- 履修、授業、L0s に関すること
 - ・ 全学の教育目標や3つのポリシーを認識していたか
 - ・ 履修科目を決める際に、その科目のラーニング・アウトカムズを意識したか
 - ・ 自身の学びを自己点検しているか
(履修科目のラーニング・アウトカムズの修得や、授業アンケートの自己評価について)
 - ・ 今後、DPに掲げる能力を身に付けることが期待できるか
- 昨年度の学生からの意見聴取を受けて取り組んだ事項について
 - ・ 学生からの意見を受けて検討および実施した取り組み等のフィードバック
- 学生生活全般に関することや機構として意見交換した事項

【1】昨年度の自己点検・評価で課題となった事項および今年度の方針・改善計画

春学期に各専攻（国際言語教育専攻は各専修）の評価分科会担当の教員と学生とでカリキュラムや研究及び生活面に関して意見交換を実施し、9月の研究科委員会で報告し検討した。特に院生の学会発表に関する支援について種々、意見交換をした。

評価分科会への学生参加

評価分科会じたいの学生参加の機会は準備しなかった。

評価分科会の学生参加

評価分科会じたいの学生参加の機会は準備しなかった。代わりに、評価分科会開催以前に学生からの意見を聴取する時間を十分に確保し、学生へのフィードバックの仕組みを検討した。

【2】今年度の取組みに関する点検・評価

2025年7月に院生懇談会を実施した。院生からの要望は以下の5点に区分できる。

①授業などカリキュラムに関する要望

・自専修以外の演習に参加するためには担当教員の承認が必要であるが、もっと手続きが簡易化できないか。

・民俗学・漢文など現在、担当教員がいない授業があるが、どうしたものか。など。

②研究設備など大学に対する要望

・図書館で貸出延長がオンラインでは1回しかできない。それ以上は、カウンターに行って手続きしないといけない。

・貸出冊数が30冊というのは少なすぎる。

・学会・研究会などの集まりの際、WiFiのパスワードが一人一人に割り当てられ、同一パスワードでログインできないので、利便性が低い。

・学内WiFiが自動接続でなく、教室や階が変わるたびに再接続が必要で不便。など。

③研究活動の現状と今後の展望

・修士段階でも学会発表や論文発表の機会が欲しいが、どうすればよいか。

・先輩や修了生など縦のつながりが欲しい。など。

④今後のキャリア形成に関し大学に望むこと

現在の担当教員が定年でいなくなるので、この後の研究の継続が不安。

・教員を目指しているが、専修免許状を取ることはできないか。

・修士終了後のキャリアに関して、修了生の声など聞ける、軽いガイダンスがあると良い。など。

⑤その他、大学生活に関する要望

・中央教育棟・図書館が午後9時に閉館するので、研究活動に不便。

・夜間はバスが少ない。

・宿泊できる施設があるとよい。

・TAの労働時間の上限が200時間であるが、これでは給与が足りない。250時間くらい必要。

・印刷可能枚数(600枚)が学部学生(800枚)より少ないのは、納得いかない。

・コピー代金の補助は可能か。

これらの要望は、根本的な問題解決が難しいものも多いが、関連部署と協議し可能な範囲で対応す

ることを参加した院生に約束した。

このほか、12月17日に、2028年度の文学研究科改組計画の説明会を、全学の院生代表2名ほか院生1名に対して行った。説明は文学研究科長、伊藤貴雄教授、赤羽副課長が担当した。

文学研究科改組に対する質問のほか、ふだんの研究活動に対して以下の要望があった。

- ①人文・社会科学の研究に必要な高額ソフトウェアに対する大学からの援助
- ②文学研究科の修士・博士の学位取得者、修了生のネットワークの構築

評価分科会の学生参加

全体の評価分科会を開催しなかったため、同分科会で学生から授業やその他の要望について意見聴取をすることができなかった。代わりに、既述のように、①専攻ごとの懇談会、②改組説明会の機会に学生からの要望や意見を聴取した。

【3】今年度の点検・評価に基づいた改善計画

<短期計画（アセスメント実施後1～2年の期間で実現可能な改善策）>

前期・後期課程いずれも新入生に対してはガイダンス時に、DPと履修科目のラーニング・アウトカムズについて説明する。2年次以降については、履修登録時に指導教官から同様の説明をするように徹底する。自身の学びを自己点検については、履修科目のラーニング・アウトカムズの修得度合いとDPに掲げる能力達成について意識できるよう、授業アンケートに項目化して記入できるようにする。

<中長期計画（アセスメント実施後3～5年の期間で取り組む改善計画）>

今年度秋学期は、2028年度改組に向けた準備が本格的に始動する。このため、具体的な改善計画については、改組案にもとづくカリキュラム改編を見据え、来年度以降の具体的な取組みの実施後、点検・評価を経て実現可能な中長期改善計画を立案する。